移韻、海韻三等認定に関わる例外反切

太田斎

提要　《切韻》中間或看到違反聲母-韻母搭配制約規則的反切。主要原因有二。其一是由於按照下字所屬韻類不改上字就沿用古反切，其二是由於不改字面直接沿用誤傳的古反切。漢語音韻史上偶爾存在由虛變真，從誤切捏造而來的字音最終成為規範音的案例。此情況有點像某個語言大量接收外來詞，而使其音韻系統變貌的現象。因此研究與古音之間的對應關係時，應該盡量排除這種誤切。

キーワード　移韻　祭韻　莅韻　例外反切　誤切

0. 前言

本稿は太田斎（2013: 246-251）で言及されている「類隔切」を取り上げ、先行小学書の引用という観点から再検討を試みる。対象となるのは齊韻中の、一部韻書で「移韻」とされる韻目に該当する反切と、咍韻上声海韻に見られる三等相当の反切である。後者は独立した韻目が建てられたことが無いので、海韻三等と呼んでおくが、韻目「莅」を用いることがある。太田斎（2013）は概説書であり、詳細、厳密な論証は為されていない。以下、本文の日本語では常用漢字を使用しているが、中国語の引用例には繁体字を使用しており、そのため漢字字体に不統一が生じている。『』等の引用符に関しても同様の不統一がある。挙例において小韻代表字とその所属字が現れる場合のみ、被注字を太字で示す。推定音価は平山久雄（2022）に従う。但し aspiration の ‘ は ^{h} に改める（董同龢 1954 の推定音価も同様）。なお同書には音声情報を盛り込んだものとより抽象度の高い体系的簡素化を追求したもの二種の推定音価が提示されている。主として前者を使用するが、上中古音との関係を論ずるには後者の方が都合が良い。ときに両者を併記するが、その場合には区別のため前者を [ ] で括る。前者にしても音声表記そのものでないことは言うまでも無い。上古音については平山久雄（2006）を参照した。但し一部、理解に供するためと称して、平山説を改竄してその場しのぎの上中古音、慧琳推定音を捏造し、説明を加えたところがある。

移韻に関する学説史の紹介は森博達（1982: 83-84）に詳しい。以下、その概略を記す。

移韻が祭韻平声相当とする説は周法高氏『玄応反切考』[1]を嚆矢とする。周氏は、『玄応音義』の移字の音注「是奚反」に関して、移・爨二字の『切韻』における反切を引き、『韻詮』「五十韻頭」[2]・『古文四声韻』・『魏鶴山集』を引用し、「通常だと四等韻には存在しないはずの日、禅母が齊韻にはある。恐らく寄韻（類音関係にある別韻の韻目中に間借りすること――本稿筆者注）なのだろう。これを分けて移韻とするものもある。齊韻の推定音価は-iei、これに対し移韻は-i̯ei（平声）。祭韻-i̯ei（去声）平声相当である。」と述べている[3]。董同龢-龍宇純[4]説はこれを敷衍し、『広韻』咍韻の昌母字「犝」、海韻の昌母字「莅」、齊韻の常母字「移」、日母字「爨」は所属字数が僅少なため寄韻されたもので、これらは祭韻に相配する平声、上声韻とした。（以上で概略紹介終わり）

董同龢-龍宇純説に従うならば、移韻所属字は齊韻（「移」、「爨」）と咍韻（「犝」）に分かれて寄韻しているということになる。そして移韻及び以下で議論する海韻三等（祭韻上声を意

1 周法高（1948）玄應反切考，《中央研究院歷史語言研究所集刊》第 20 本上冊，上海，359-444 頁
2 2 安然『悉曇蔵』巻二 p.383 下に見える。著者名はここに見えないが、『唐書・芸文志』によって知れる。
3 「玄應反切考」p.409。周氏の推定音価 i̯ei は平山説の iɛi(/ɪɛi) に当る。
4 董同龢（1954：102-103）、龍宇純（1960：96-97）。

味する場合には、便宜的に「莅韻」と呼ぶ）の該当字には唇牙喉音声母のものが見られないが、祭韻に相配すると見做すのであれば、同様に重紐韻の性格を持つことになる。董同龢 1954, p.102 参照。この問題は以下で触れる。

1. 平声移韻

「類隔切」は通常、上字–帰字間に幇組–非組、端組–知組、精組–荘組などの声母のズレが見られる反切を指す。本稿ではこのようなものを含め、「音和切」以外の、上字声母と下字韻母の結合制約違反の反切及び帰字と下字の等位不一致反切の総称として、「例外反切」を用いる。

1.1. 「犨：昌來」

「犨：昌來」小韻は『広韻』のみに見られる。上述の学説紹介にある通り、咍韻中にあるが、董同龢–龍宇純は栘韻所属小韻が寄韻したものとしているので、先ずはこの小韻から検討する。帰字の帰属は「蟹開一平咍昌」、さもなくば「蟹開平三咍昌」。咍韻は一等韻のみから成る。上字の「昌」は章組字の一つで、声母名にもなっている。章組は日母同様、三等韻としか結びつかないから、本来あり得ない組み合わせの反切である。なお「犨」は別に「土刀切」の音がある。こちらは「效開一平豪透」で、上下字の組み合わせに問題は無い。

「犨：昌來」は切韻系韻書の中では『広韻』にしか見えないこの字一字のみの増加小韻である。『広韻』にはまた「土刀」という反切の字音が別にある。いずれの場合の釈文も「牛羊無子」で、咍韻の音は何らかの誤写を想定しない限り、どうにも説明がつかない。余明象 1980 は「來」は「求」を誤ったものと断じており、「犨：昌求」であれば上下字の組み合わせに問題は無く、「流開平三尤昌」の帰字を帰納できる。そうであれば「犨：昌來」小韻を咍韻から取り除き、「犨」を既にある尤韻「犪：赤周」小韻に増加字として付け加えれば良い。なお「赤周」については、現存切韻系韻書間で反切用字に異同は無い。

この誤切の登場はかなり古く、小韻としての独立は『広韻』まで待たねばならないが、又音としてなら切三などにも見える。「徒刀」という反切で表される別音の方は『広韻』以外の切韻系韻書に収録されており、そこに現れる又音に注目すると、面白いことに気付く。以下、X(<Y)、のようにあるのは、XはYを誤ったもの、Y であるべきの意。X(<Y<Z)のようにあるのは、二段階の誤認があったと想定され、Z が本来あるべき姿であることを意味する。

廣韻　**饕**：土刀切。……　犨　牛羊無子。又昌來(<求)切。
――――――――――――――――――――――――――――――――――――
切三　**饕**：吐蒿反。……　犨　牛羊無子。又昌來(<求)、充(<度)牢反。
　　cf.**陶**：徒刀反。　「犨」未収
王一　**饕**：吐高反。……　犨　牛羊無子。又曷(<昌)來(<求)、充(<度)牢反。
　　cf.**陶**：徒刀反。……　犨　牛羊無子。
王二　**饕**：吐高反。……　犨　牛羊無子。又昌來(<求)、充(<度)牢反。
　　cf.**陶**：徒刀反。……　犨　牛羊無子。又土刀反。
王三　**饕**：吐高反。……　犨　牛無子。羊無子。又高(<昌)來(<求)、元(<充<度)牢反。
　　cf.**陶**：徒刀反。……　犨　牛羊無子。
cf.朱翺　犨　牛羊無子也。從牛㠯聲。讀若糗糧之糗。特豪反。《說文解字繫傳》3/4b4, p.25 下
cf.大徐　牛羊無子也。从牛聲。讀若糗糧之糗。徒刀切。　《說文解字》(《詁林》)9/538a

恐らく元々「犨」には豪韻透母、定母及び尤韻昌母の三音があって、そのうちの豪韻透母の音が代表的だったので、原本『切韻』において、先ずは「**饕**：吐高反」（上田正 1975 推定原本

『切韻』反切）小韻の所属字として収録された。『広韻』はそこに見える「昌求」を「昌來」と誤った又切を、下字が咍韻所属ということで咍韻に取り込み、小韻として独立させたもののようである。その際、何故か切三等に見えるもう一つの又音「充牢反」は捨て去られてしまった。余明象（1980）の所説を具体的に紹介すると、王国維、姜亮夫の切三写本では「來」のようにも見えるが、正しく「求」に作っているという[5]。そして元泰定本『広韻』は確かに「又昌求切」に作る。『集韻』尤韻「犨：蚩周切」小韻の所属字となっていることからも「來」が「求」の誤字であることは明らかだと言う。

『集韻』には以下のように全部で九音収録する。末尾に参考として加えたものは原本『玉篇』の反切と宋本『玉篇』の反切である。前者は上田正（1986）に拠る。

咍韻端母 **黵**：當來切　　**犒**　牛羊無子。
咍韻昌母 **犒**：昌來切。牛羊無子。
宵韻昌母 **怊**：蚩招切。　　**犒**　牛羊不生子也。
豪韻透母 **饕**：他刀切。　　**犒**　牛羊無子也。
豪韻定母 **匋**：徒刀切。　　**犒犒**　《說文》“牛羊無子也。隸作犒。
尤韻昌母 **犨犨**：蚩周切。　　**犒**　畜無子謂之犒。
有韻溪母 **糗杲**：去九切。　　**犒**　牛無子。
cf. **犒**：去有切。无牛羊也。　《玉篇》上田正（1986：241）
cf. **犒**：徒刀、充刀二切。牛羊無子。　宋本《玉篇》下 25a9

もう一つの又音「充牢反」もまた昌母＋一等下字で、やはり等位不一致反切である。上字「充」は恐らく「度」の誤りで、本来は定母上字であろう。『集韻』豪韻に透母、定母の小韻はあるが、昌母小韻が存在しないことはそれを裏付けるものと思われるが、上掲例で見る通り、切韻系韻書豪韻透母小韻に見える「犒」の又音はいずれも「充牢反」（王三は「元牢反」）となっており、この誤切が既に定着していたことが窺われる。さすれば『集韻』は「犒」の又音に関し、切韻系韻書以外の文献に依拠して正しく処理したと考えるべきだろう。『広韻』豪韻定母小韻にこの字は未収だが、上掲例で分かるように王一、王二、王三には収録されており、『説文解字繫傳』にも定母音として収録される。宋本『玉篇』に「徒刀、充刀二切」とあるのも、昌母上字に誤った反切を別音と見做して付け加えたものと解釈できる。「度刀」なら「徒刀」と同音である。

余明象（1980）の主張する如く、切三の又音が正しく「昌求」であるにせよ、「求」を誤って「犒：昌來」とした反切が現れたのは遅くとも唐代であることは疑いない。「犒」の昌母音の存在がどこまで遡ることができるか未詳だが、この誤切の誕生は或は六朝期まで遡れるかも知れない。『広韻』でこの反切を下字がどの韻に所属しているかに即し、機械的にその韻に帰属せしめた結果、一等咍韻に昌母字が存在することになった。誤切が表わすのは実在しない架空の字音である。咍韻には他に等位不一致反切は無い。栘韻小韻の咍韻への寄韻は認めるに及ばない。

1.2. 「鱗：人兮」

この反切に代表される小韻は齊韻末尾に置かれ、所属字はこの被切字一字のみで、いかにも増加小韻臭いが、切三にも見え、上田正（1976）は原本『切韻』に存在したと推定する。「鱗：人兮」の上字「人」ɲiĕn 平 の声母は半歯音の日母 ȵ-。日母は三等韻としか結びつかないはずなのに、下字は四等齊韻の「兮」ɦɛi 平である。強引にこの上下字からȵɛi 平という音韻体系から逸脱する字音を捻り出すか、それとも臨時に読み替えて nɛi もしくは ȵiɛi とするか、解釈に苦しむ。

以下に掲げる例で分かるように、この「人兮」と同じ或いは類似の反切が『経典釈文』所引の

5 遺憾ながら、周祖謨（1983：84）所載写真で確認しても、本稿筆者の目には「求」には見えない。

呂忱『字林』に見られる。『切韻』編纂に利用されたとされるいわゆる「五家韻書」の一つとして呂忱の弟呂靜の『韻集』があるが、『切韻』編纂に呂忱『字林』が利用されたという記載は無い。上田正 1976 の推定が正しいものとして、更に推論を重ねることになるが、もし「臡：人兮」が『韻集』由来であるならば、それが『字林』反切と一致するというのは単なる偶然の一致なのか。両書とも既に失われ、現存する佚文からは知りようがない。『魏書』「江式傳」には「文字與兄便是魯衛，音読楚夏，時有不同。（文字に関しては兄と魯と衛ほどの違い（極僅かな違い）しかないが、字音に関しては楚と中原ほどの隔たり（かなりの隔たり）があり、時に一致しないところがある）」とある。「臡：人兮」を原本『切韻』が取り込んだと見做すなら、両書が如何なる関係にあったか、何らかの検証が必要だろう。なお『切韻』増補の過程で『字林』が利用されていることは、『十韻彙編』等で確認できる。「臡：人兮」を上田正（1976）は原本『切韻』に存在したと推定するが、もし原本『切韻』に無く、（早期の）増補で付け加えられたものと実証できれば両書の関係を云々するには及ばない。但し『字林』という書名は王二、『唐韻』及び『広韻』以外では見られない。龍宇純（1968）に基づく限りでは王三にも見えない。早期の増補では『字林』は利用されなかった可能性もある。一方、『広韻』には『説文字林』という書名も見られる（この書名は『経典釈文』にも見える。以下で改めて触れることがある）。切三でも『説文』という書名は見える。切韻改訂版テキストに現れる『説文』が『字林』と何らかの関係があった可能性もあるので、直ちに早期の増補での利用は無かったとも言い難い。

1. 臡：奴兮反。……《字林》作腝，人兮反。　《儀禮》152/20a/8
2. 臡：字作臡，乃兮反。《字林》作腝，人兮反。　《禮記二》185/12a/5
3. 臡：又作臡同，奴黎反。《字林》作腝，音人兮反。　《爾雅上》417/21b/7
4. cf. 臡：劉(昌宗)奴兮反。徐(邈)耳齊反。　《周禮上》110/5a/1
5. cf. 臡：乃兮反，又人齊反。　《周禮上》111/8b/5
6. cf. 臡：乃兮反，又人兮反。　《儀禮》161/37b/7

---

7. cf. 臡：奴雞反。　《玉篇》上田正 1986, p.48
8. cf. 臡：若犂反。　《急就篇》　大島正二 1981 資料 p.420
9. cf. 臡：(音)泥。　《急就篇》　大島正二 1981 資料 p.417
10. cf. 臡：(音)泥。　《爾雅音釋・釋器》p.108/4
11. cf. 醢有骨者曰“臡”(：如吮反)。臡，胒也。骨肉相摶，胒無汁也。　《釋名》p.209
12. cf. 肉謂之醢肉醬，有骨者謂之臡雜骨醬。見《周禮》。　《爾雅・釋器》pp.68-69
13. cf. 臡　腝或从難。　《說文解字詁林》p.1798b

『広韻』の「臡：人兮」は『経典釈文』経由の間接的引用の可能性が高い。上掲例 1, 2. から見て、元は『字林』由来と知れる。更に元を辿れば、11.『釋名』「臡，胒也」(“胒”を“泥”に作るテキストもある) に見るように、そもそもは義注であった「臡，泥(<胒)也」を9,10.に見るように、音注と取り違え、「臡音泥(<胒)」として後代に伝えたものらしい。恐らく上掲例中の泥母反切はこれを反切に改めたものである。但し『爾雅音釋』の方は『爾雅郭璞注』の早期テキストには附されておらず、現存テキストに基づく限り、成書年代は宋代以前にまで遡れない。附された反切が「～反」とあるから早期に『爾雅郭璞注』に付け加えられた可能性もあるが、後人が郭璞に仮託するに当たり擬古的に「～切」を「～反」としたとも考え得る。安易に判断を下すべきではないが、二等重韻の合併、重紐 AB の合併のような中古以降の変化を反映する音注が混じるので、後者の可能性が高い。従って 10.は郭璞由来と見做し難い。11.「如吮反」という反切は収録しないテキストもあり、後人が付け加えたものだろうが、検討対象に含める。下字「吮」に

は準韻船母「食允」、獮韻従母「徂兗」、獮韻邪母「徐兗」の三音あり、以下の『広韻』（1,2,3.）、『集韻』（4,5,6,7,8）の記載を見ると、釈義は一致しないが、『広韻』の 1、『集韻』の 8.と対応しているようである。「如吮反」もまた獮韻音を表わすものだろう。『広韻』及び『経典釈文』に見える「臡」の異体字「腝」、通仮字「臑」の字音は以下の通り：

『広韻』

1.**輭**：而兗切。　**腝**　腳疾。　（獮韻日母）
2.**嫩**：奴困切。　**腝**　肉腝。　（慁韻泥母）
3.**腝**：那到切。臂節。　（号韻増加小韻泥母）

『集韻』

4.**而**：人之切。　**胹腝臑**⿰鬲而⿰火而　《說文》“爛也”。《方言》“秦晉之郊謂孰　曰胹”。（之韻日母）
5.**腝臡**⿰鬲耎：人栘切。《說文》“有骨醢也”。或从難，从鬲　（齊韻日母）
6.**泥**：年題切。　**腝臡**　有骨醢。或作臡。　（齊韻泥母）
7.**荋**：汝來切。　**腝**⿰鬲耎**臡**　有骨醢。或作⿰鬲耎、臡。　（咍韻日母）
8.**耎**：乳兗切。　**腝**　足疾。　（獮韻日母）

『經典釈文』

1. 臑：奴報反。《字林》人于反。又音羊吳反。　《周禮下》128/6b9
2. 臑：乃報反。《字林》人于反。　《儀禮》146/8b6
3. 臑：奴報反。《說文》讀為儒。《字林》云，……人于反。　《儀禮》148/11a11
4. 臑：乃管反。　《儀禮》157/30b9
5. 臑：奴到反。又人于反。　《儀禮》160/36a5
6. 臑：奴報反，又奴到反。《說文》云，……讀若襦(一本作“儒”)。《字林》人於(>于)反。又音羊吳反。　《禮記二》194/30b5
7. 臑：音而。　《儀禮》196/3a11

X(>Y) は X は Y に正すべきという意味。「如吮反」が上掲の 1~8. の齊韻反切の元となっているのであれば、字体の類似という点でやや難があるが、下字が例えば「兗」（若しくは「沇」？）であった「*人兗」を「人兮」に誤ったという可能性もあろう[6]。「人兗」という反切は『経典釈文』に実例がある（帰字は「耎」、「荑」、「⿱⿰兗兗」等）。声符を見れば、「腝」が獮韻音であることに抵抗は無い。これ以外の推測の余地もある。その二、『集韻』の異体字収録状況からすると、「臑」は之韻音しか無いようだが、如上の 3.『広韻』と『経典釈文』の例を見ると、「腝」との間の通用関係が窺われる。「臑」の『字林』音「人于反」（中古音では虞韻日母）が「人兮反」に誤り、「腝：人兮反」となり、帰字に異体字の「臡」を用いたのが『広韻』反切であるとも考えられる。「于」は「亏」、「亐」のように書かれることもあるから、「兮」に誤ることは容易に起こるだろう。その三、獮韻音「*人兗(反)」と「(音)泥」由来の何らかの齊韻音反切の二音併記であったものが誤って一つにされて齊韻日母の反切が生まれた。いずれの推定でも上字が日母という点には説明が付く。この三つの可能性のうち、相対的にはその二が有力である。それに基づくと、齊韻泥母音は義注を音注と誤認したもの、齊韻日母の音は虞韻日母の反切の誤写を契機に生まれたものということになる。どちらも誤切であるが、結果として同音にして用字不

6 本来、準韻音「*人允」であったと見做す余地も無いではない。但し「允」→「兮」の誤認を想定し易い反面、『広韻』、『集韻』には「允」に獮韻音が認められないから、これが「兗」（或いは「沇」？「抁」？）に誤って獮韻音として後世に伝わったとせねばならなくなる。「臡」の準韻音が存在しないので、この考えは採らない。

同の二つの誤切が六朝期に並び行われていたということだろう。

ここで『経典釈文』の複数反切列挙をどのように考えるかについて述べておきたい。『経典釈文』は周知の如く、諸家の反切を列挙する。韻書だと複数の反切が列挙された場合、それらを又音として異音を表わすものと見做す。しかし音義書である『経典釈文』の複数の反切は必ずしも別音を表わすものではなく、学統による反切用字の違いを示しているともとれる。例えば上掲「黲」の 1,2,3 をみると、「黲」と『字林』の「腞」は異体字の関係にあり、『字林』では「腞」に「人兮反」の反切を与えている。「奴兮反」と「人兮反」は用字不同の同音反切と解釈できる。これをさらに簡素化して、書名及び「腞」を省略したものが 6 であると考えれば、6 の「乃兮反」と「又人兮反」もまた異音を表すものではなく、1,2,3 同様に用字の異なる同音反切の併記に過ぎないと見ることができる。恐らくこの状況は『経典釈文』全書に亘るもので、複数列挙される反切は別音とは限らず、異体字そして時には基づくところの人名、書名まで省略した結果と考えられるものが散見する。無論、全ての反切併記を一律にかく解釈できるというのではない。

既に述べたように、恐らくは共に義注を音注と誤認することで生まれた虚構の反切ながらも通行するようになっていた「黲」の「人兮」、「奴低」二切は同音であった。呂忱の音韻体系には日母と泥母の区別が無く、『字林』では通常「奴低」で表わされる規範音 nɛi を「人兮」を以て表わしていたと考えられる。呂忱の音韻体系については簡啓賢（2003）の試みがあり、齊部 iɛi としているが（p.175）[7]、これを用いると平山説と齟齬を来すので、従わない。当面の問題に限っては中古音の推定音価を代用しても説明は可能である。原本『切韻』には既にこの字音を表す「奴低」という反切の小韻があり、「黲」はここに収められていたから、わざわざ新たに付け加える必要が無かったにも拘らず、上字が泥母ではなく、日母であったため ɲɛi という未収小韻であると誤認し、収録してしまった。そのため日-泥に関し、齊韻中に見かけ上のミニマルペアが出来てしまったということだろう。原本『切韻』の編纂及びその増補改訂において『経典釈文』のような複数の同音反切を列挙するような体例の小学書から被切字及び反切上下字を取り込む場合には、韻書に即して考えれば、既に指摘したように、自ずとそれらを別音と見做すことになる。通常、下字の韻類に即して『切韻』に取り込む訳だが、当時の編者は音声記号で字音を理解していた訳ではない。別音の前提に立っていれば、上字を妄りに改変することは慎まれたことだろう。

1.3. 「栘：成西」

齊韻に寄韻する栘韻とされる小韻は前節で取り上げた「黲：人兮」の他には「栘：成西」のみ。上田正 1976 は現存『切韻』テキスト間で用字の異同が見られるものの、この反切で提示される小韻もまた原本『切韻』に存在したと推定する。以下に切韻系テキスト間の異同及同時代資料に見られる反切を挙げる。

1.栘：成西　　王三、P2015-2　　（上田正 1976 推定原本『切韻』反切）
2.栘：成栖　　切三
3.栘：成黲　　廣韻　= 古文四聲韻 p.14 下
4. cf. 栘：成兮　　毛詩音(S.2729)平山（1966：92）　= 十卷本說文篆韻譜(腞>栘：成兮)
　cf. 移：弋支切　　栘 扶栘，木名。又成兮切　　廣韻
5. cf. 栘：是奚　　玄應 38/3,776/4,1157/4
6. cf. 腞(>栘)：成奚　　五卷本說文篆韻譜 p.55/6

7 なお該当例の存在を確認できないが、皆部（＞中古霽韻）は iəi であるとする（p.169）。また『切韻』序（韻目小注―本稿筆者注）に呂靜「霽與祭有別」とあるが、厳密には区別があるにせよ、霽―祭間の押韻を否定するものではないとして、祭部（＞霽）は iai と推定している（pp.179-180）。平山説は六朝期の推定音を提示していないが、中古四等韻に拗介音を認めておらず、iɛi は祭韻に当てられている。本稿では平山説に依拠しているので、簡啓賢説と直接結びつけて論ずる訳にはいかない。

7. cf. 視：成詣(>旨?)　　禮記音　大島正二 1981 資料 p.420 （《廣韻》視，止開三去至常）

「栘」には支韻以母の別音あり、こちらもまた原本『切韻』において存在していたと考えられる。『経典釈文』(9-11) と併せ、以下に掲げる。「成西」と同じ構成の反切は『経典釈文』所引の呂忱『字林』に見られる(no.9.)。

8. 栘：弋支　切二、切三、王二、王三、廣韻　支韻以母小韻所屬(小韻代表字“移”)

---

9. 栘：以支反。《字林》上泥反。　《爾雅下》429/12b/11
10. 栘也：音移。一音是兮反。郭璞云，今白栘也。似白楊，江東呼夫栘。　《毛詩上》57/9a/8
11. 常棣也：本或作常棣栘。(栘)音以支反，又是兮反。案《爾雅》云，唐棣栘、常棣棣。作栘者非。　《毛詩中》75/10a/1

「以」、「弋」は共に以母につき、9,11. の「以支反」と 8.の「弋支反」は同音を表わす。5.の下字「奚」と 9,11.の下字「兮」は共に匣母で同音である。9.に見える『字林』「上泥反」が 1.「栘：成西」同様、上字常母、下字齊韻である点は注目に値する。この他、2,3,4.も上字がやはり常母「成」で下字「栖」、「鷖」、「兮」はいずれも齊韻、5.「栘：是奚」及び 10,11.の「栘：是兮反」も同様に上字常母、下字齊韻である。『字林』は字書であるから複数の同音反切があり得るが、これらの反切を総て『字林』由来若しくは『字林』反切を後人が「昌母上字+齊韻」の構成を崩すことなく改変したものと見做すには十分な根拠が無い。しかし前節の上字日母、下字齊韻の「人兮反」もまた『字林』に見られる反切であった。このような構成の例外反切の淵源を『字林』に求めるのは無理なことではない。既に述べたように一般的に韻書が他書に見える未収字を取り込む場合、そこに見える反切下字が如何なる韻に相当するかを勘案して収録すると考えられる。既に該当する小韻があれば、その末尾に増加字として追加するが、該当する小韻が存在しなければ、基本的にそのまま反切用字を変えずに取り込んだであろう。特に上字は字音の認定に変更を齎す虞があるから、安易に改める訳には行かなかったに違いない。これに対し、下字の方はその韻に収録される如何なる字（但し同一韻類所属であらねばならない）にも原則代替可能なので、使用例が無いものであれば、既出の用字に改めることはあったろう。切韻系韻書において「成」は反切上字としては上記の反切にしか現れない。ということは上田 1975 推定の「栘：成西」が他書に見られる反切を取り込んだものであるならば、元の反切上字もまた「成」であったと推定できる。但し下字「西」、「栖」もまた他に例を見ない。これについては『切韻』で当初は「栘：成稽」として取り込まれたと推測する。『敦煌毛詩音（S.2729）』について「古い層は「7 世紀半ば以前の音韻体系を反映する可能性がある」（平山 1966,p.6 注(4)）との指摘があり、4.「栘：成兮」が古層に属するもので、『切韻』に収録される元となった反切である可能性が無いではないが、「兮」は反切下字としての用例が他に見られるので、「兮」をわざわざ他に例の無い「西」に改めたとは想定し難い。改める特段の理由が見出されない限り、元の反切と見做すべきではない。なおこの反切は『広韻』で又音として現れる（上掲例 4.）。正切の「栘：成鷖」と同音の反切を改めて殊更に挙げる理由は不明だが、これは『毛詩音』、十巻本『説文篆韻譜』所拠『切韻』の反切を襲ったものかも知れない。

所拠文献に存在した反切の下字が本来何であったかについては、明らかにする術が無い。切三では「稽」は異体字の「嵇」で現れる。『切韻』では「稽」は下字として多用される。これを「棲」に誤り、異体字「栖」で表記されるようになり、更にはそれを「西」に誤ったということではないか？ならば 2.の切三の「栖」の方が 1.の王三、P2015-2 の「西」より元の形に近いということになる。結局どの字であっても齊韻所属字であるから、帰納される字音に違いは生じない。

『広韻』の場合はこれを「臡：人兮反」と共に一つの韻類を形成するものと見做して、下字を「臡」に改めたものだろう。それなら「臡：人兮反」の方を何故「臡：人栘反」としなかったのか、これについては校勘の不徹底と考えておく。

序ながら、「3.栘：成臡」と同じ反切は字体の書ながら『古文四聲韻』にも見られる。これは『広韻』を襲ったものだろう。4. と同じ反切上下字の例は十巻本『説文篆韻譜』に見られる。但し被切字が異なる。面白いことに該当部分の被切字を通行の字体で示すと、「**腴**：成兮反。有骨醢。 臡 同」(上巻 2b)となっており、6.に示す五巻本『説文篆韻譜』の方は「**腴**：成奚反。 臡 骨醬。上同」となっている。つまりどちらにおいても「腴」と「臡」は異体字と見做されている。「臡」は前節 **1.2.** で示したように「臡」の異体字である。つまり十巻本であれ、五巻本であれ、『説文篆韻譜』は「栘」に附されるべき反切と「臡」に附されるべき反切を取り違え、被切字「栘」はいずれにおいても支部に「弋支反」として挙げられるのみで、齊部には収録されない。そして「臡」に附されるべき反切も収められていない。4.「腴：成兮」、6.「腴：成奚」はいずれにせよ反切上下字に即して考えるならば、現存する切韻系韻書で齊韻常母小韻の存在を確認できる切三、王三、P2015-2、『広韻』のいずれにおいても所属字は「栘」一字のみだから、どちらの被切字も「栘」であったに違いない。つまりこのような校訂により、『説文篆韻譜』から切韻系韻書における「栘：成兮」、「栘：成奚」の存在を見て取ることができる。なお十巻本、五巻本がそれぞれ如何なる切韻系韻書に基づいたかについて議論があるが、今それは問題としない。

今、話を分かり易くするために、上古音的要素を加味したご都合主義の推定音価（平山説を恣意的に加工したもの）を使う。そして『切韻』が依拠した文献の反切を「栘：成 X」としておく。これは 9.「上*djiɑŋ 上泥*ne 平」（*dji-+*-e→*djie）同様、上字常母＋下字齊韻の構成で、「成*djiɛŋ X*-e」（*dji-+*-e→*djie)と理解すべきもの、つまり上字が介音をも担う反切であった。本来「弋*djie 支*tjie」*djie と同じ字音を意味していたにも拘らず、下字 X が齊韻所属相当の字であったため、『切韻』はこれを同じ齊韻所属の「稽」に改め、「栘：成稽」として齊韻に収めたということではないか。四等韻は常母とも以母とも結合しないが、上字を改めるのは躊躇われたに違いない。それで齊韻常母字が存在することになった。つまり、結果として古切を下字の所属に即してほぼそのまま取り込んだことにより、中古音では実在しない架空の字音を生み出したのである。「弋支」が中古音においても依然として通常の反切の理解で正しく帰字を帰納できるのに対し、「成稽」の方は大きく乖離してしまった。

坂井健一 1975 の『経典釈文』所引諸家音注の研究に依れば、『字林』における常母-以母通用例と思しきものに「箷：上支反、羊支反」がある（p.85）。該当箇所は具体的には以下の通り。

箷：李(巡)本作篹同。羊支反。《字林》上支反。　《爾雅上》418/23a1
cf. **箷**：羊支反。《字林》云，竿也。本或作椸，音同。《字林》云，“榻前机也”。　《爾雅上》415/18b1
cf. **箷**　衣架。**椸**　上同。又榻前几。　《廣韻》支韻 **移**：弋支切小韻
cf. **篹**　《說文》曰，“簧屬”。　《廣韻》支韻 **提**：是支切小韻
cf. **椸箷提**𣞤　《方言》“榻前几。趙魏之間謂之椸”。一曰衣架。或作椸箷**提**𣞤
《集韻》支韻 **移**：余支切小韻
cf. **篹**　《說文》“簧屬”。　**箷**　《爾雅》“竿謂之箷。所以架衣者”。通作篹
《集韻》支韻 **匙**：常支切小韻

「箷」、「篹」は元は別字で、前者は「羊支反」、後者は「上支反」であったものが、いつしか通用されるようになり、前者が後者の音でも読まれるようになったということなのだろう。今、二つの反切が、『字林』において必ずしも完全な同音であったとは限らないが、通用を許すほど

に以母と常母が近い音価を持っていたと言うことはできる。
李軌にも同様の例がある（p.64）。該当箇所は具体的には以下の通り。

1. 汋：音灼。又上若反。李(軌)以略反。　《莊子中》388/31b4
2. cf. 汋：七(<上)藥反。徐音酌。一音市藥反。　《莊子》253/14a8
3. cf. 汋：音勺。又七(<上)藥反。一音常藥反。　《莊子》253/14a9
4. cf. 汋：由若反。一音酌。　《穀梁》331/13a8
5. cf. 汋：仕捉反。又上若反。　《爾雅上》422/32b5
6. cf. 汋：余弱反。　《爾雅上》420/27a1
7. cf. 汋：以灼反。　《爾雅下》426/6a11,426/6b10
8. cf. **汋**　《說文》曰：“激水聲也”。一曰井一有水，一無水為濁汋。　《廣韻》覺韻崇母涿：士角切小韻
9. cf. **勺**　……　**汋**　濁汋。又土(<士)角切。　《廣韻》藥韻常母妁：市若切小韻
10. cf. **灼**：之若切　……**勺**　……　**酌**　……　**妁**　……　《廣韻》藥韻章母小韻

『広韻』と対照すると、1.「灼」、2. 「酌」、3. 「勺」が「之若切」に、1,5.「上若反」、2,3.「七(<上)藥反」、2.「市藥反」、3.「常藥反」が「市若切」に、1.「以略反」、4.「由若反」、6.「余弱反」、7.「以灼反」が「以灼切」に、そして「仕捉反」が「士角切」に対応していると言えそうである。3.「(音)勺」は「市若切」に対応している可能性も無いではない。そうであれば「七(<上)藥反」、「常藥反」と併せ三者同音と見做すことになる。但し陸徳明（或いは用字をかく改めた後人）にとっては「七(<上)藥反」は清母音と認識されていたろう。この場合は「(音)勺」は章母として、続く清母音、常母音と三者不同と見做すのが至当、つまり「(音)勺」は「之若切」相当と見做すべきである。『広韻』藥韻以母「藥：以灼切」小韻には「汋」及び直音注として用いられたこれらの字は現れない。
ここで問題となるのは「市若切」相当の音と「以灼切」相当の音との相通である。6,7.の例があることから、「以略反」は誤写を疑う必要は無さそうである。「上若反」にしても 5.に同じ字面の反切がある。
該当例が十分とは言えず、六朝期に広く見られる現象とは考えられないが、この二例から少なくとも呂忱、李軌に見られる方音的特徴として常–以相通を認めて良かろう。
齊韻-支韻の相通には以下のような例がある（坂井 1975 p.238, 287）。

1. 驪：力知反。沈(重)又郎西反。……《說文字林》……。　《毛詩下》104/30a2
2. 驪：力知反。徐(邈)郎西反。　《禮記一》167/12b2
3. 驪：徐(邈)力池反。李(軌)音犁。　《莊子中》375/6b1
4. 驪：力知反。又音黎。　《莊子下》405/32a9
5. 驪：力知反。《字林》力兮反。　《爾雅下》437/27a5

---

1. 鵹：《詩傳》作離。阮(?)、謝(嶠)同，力知反。施(乾)音黎。《說文》作雡。……《字林》作，力兮反。　《爾雅下》434/22a6
2. 鵹：力兮反。又力知反。　《爾雅下》435/23a7
3. 鵹：音離。　《爾雅下》434/22a3

1.の『説文字林』は『説文』、『字林』と二書扱いすべきかも知れない。「驪」、「鵹」いずれも来母で支韻と齊韻の音がある。前者が規範音で後者が非規範音若しくは方音ということであ

ろうか。齊韻の音を挙げるのは「驪」では1,2.徐邈、2.李軌、5.《字林》、「鶖」では1.施乾、そして1.《字林》である。

ここでも先の「9. 栘：以支反。《字林》上泥反。」同様、『字林』と言う書名が現れる。呂忱の音韻体系ではこの「泥(娘)-日不分」、「齊-支相通」二つの特徴を兼ね備えていた。つまり「成西」と「弋支」は先の御都合主義の推定音価で示したように、恐らく同音であったろう。もし後者が先に現れたのであれば、上字「成」が「弋」（＞「戈」）、「杙」或いは「上」の誤写に由来する可能性も一考に値しよう。但し「弋西」、「杙西」の実例を見ない（「戈西」も）。「上」は字体の類似と言う点で難があるが、「𠂢」（「弋」の古文）の右下一部が欠ければ「上」と誤認されることもあろう。上掲例に『字林』由来の 9.「栘：上泥反」及び「簁：上支反」があり、『字林』において既に「栘：弋支反」を「栘：上支反」と誤っていたものかも知れない。但し誤写では下字の「支」と「西」（/「兮」/「泥」）との違いまでは説明し切れない。また『切韻』では反切上字に「上」を用いることは無いから、「栘：上泥反」を取り込むに当たって上字をわざわざ希少反切上字の「成」に改めたと想定せざるを得なくなり、先に提示した本稿の想定と矛盾する。直接の引用とするならば、このような誤写に因るとする解釈は否定される。とまれ「栘：成西(栖/鬱)」は常母＋四等韻の組み合わせで、依然として例外反切であり、齊韻-支韻の相通を想定しなければ説明が付かない。「栘」は本節冒頭挙例中の 4.に見るように支韻以母「移：弋支」小韻中に収められているから、これで十分であった。

齊韻の日母、常母小韻はいずれも六朝期の早期反切を（ほとんど）字面を変えずに『切韻』に取り込むことによって生じた本来実在しない字音を表わすものである。前者には反切用字の誤写も絡む。栘韻は敢えて認めるには及ばない。

2. 葭韻（海韻三等）「葭：昌紿」

先の例と同様に提示すれば、『広韻』海韻に寄韻されたと見なす葭韻所属字は以下の通り。上田正（1976）の推定では、最初の 1 例のみは原本『切韻』から存在する。それ以外（2, 3, 4.）は総て『広韻』のみに見られる増加小韻。

1. 葭　：昌紿 切　　一等上声海韻昌母　=**王一**
2. cf.葭：昌待　**切三、王二**　（上田正 1976 推定原本『切韻』反切）
3. cf.葭：昌殆　**王三**

---

4. 佁：夷在（以母+一等）　増加小韻　=《玉篇》上田正 1986 p.196
5. 疒：如亥（日母+一等）　増加小韻　=《玉篇》上田正 1986 p.195
6. 腲：與改（以母+一等）　増加小韻　　4.と同音　cf.《宋本玉篇》羊改切 上 73b5

1.「葭：昌紿」は下字「紿」dʌi 上が一等海韻字である。海韻は開口一等韻のみから成り、三等相当の韻類は体系的空き間となっていると理解されている。然るに上字「昌」tɕʰiɑŋ 平は昌母 tɕʰ-。昌母は既に指摘した通り、三等韻としか結びつかないものである。この上下字から帰納される帰字の推定音は機械的に上字声母と下字韻母を組み合わせれば、*tɕʰʌi 平となるが、これは音韻体系から逸脱している。等韻門法は一般に上字に即して解すべしとするが、そうであれば上字が介音をも担うものとして、tɕʰiʌi が導き出される。

中古音の枠にあっては栘韻、葭韻（海韻三等）をさて措けば、蟹摂の三等韻は去声のみの C 類廃韻と重紐韻祭韻しかない。章組は荘組とは異なり、精組との相通は見られないから、上字が「昌」のままだと tsʰʌi と読み替えて清母「采：倉宰」tsʰʌi と同音と見る訳にも行かない。現行の最も説得力のある解釈は、一等韻のみから成るとされた海韻に僅か一例の三等韻 iʌi が含まれて

いるとするものである。それを敷衍すれば、原本『切韻』の段階では「葭」は海韻で唯一の三等小韻字で、これを反切で表そうにも然るべき反切下字が無いので一等韻下字を代用せざるを得ず、その結果、上字が拗介音をも担う反切となっていると解される[8]。『広韻』には他に 4, 5, 6. もあるが、これらは既に指摘した如く、いずれも増加小韻である。原本『切韻』にまで遡れば、海韻の例外反切は「葭：昌紿」（原本『切韻』は「葭：昌待」）しかない。海韻に相配する平声咍韻、去声代韻及び咍韻に対応する合口の平声灰韻、上声賄韻、去声隊韻にも三等韻らしきものは全く見られない。咍韻平上去声及びこれに対応する合口灰韻平上去声を通じ、三等韻の小韻がこの一つしかないというのは如何にも奇異に映る。

そこで **0. 前言**で紹介した董同龢–龍宇純説では海韻に祭韻上声相当の三等韻の韻類が含まれるとした。このような解釈は、「葭：昌紿」小韻の特異性を軽減できると同時に、祭韻平声相当の「栘」韻を認め、相配する平、上、去声を揃えることで、蟹摂に集中する去声のみの韻を一つ減らし、よりバランスのとれた体系を想定できるというメリットもある。

但しどのような推定音価を与えるかについては検討が必要である。平山久雄氏は葭韻について言及されていなかったように思う。氏の推定音価から推測するにそもそも認めておられなかった可能性が高い[9]。以下の説明もまた平山久雄（2022）の推定音価を用いてはいるが、決して氏の主張を反映するものではない。海韻 ʌi の三等韻 iʌi を認めるならば「葭」$tɕ^{h}iʌi^{平}$ ということになるが、iʌi は廃韻に与えられている。祭韻上声相当とするなら、祭韻は重紐韻で推定音価は A:iɛi、B: ɪɛi（合口については省略）だから、この音価を当てることになる。$tɕ^{h}$- と結合する韻母は音声的に A 相当とされ、「葭」の推定音価は $tɕ^{h}$iɛi が与えられる。これは祭韻昌母「掣」の上声に当る。但し B: ɪɛi の方は結びつく実例が存在しないから、一先ず考慮の対象から除外しても良い。すると一等韻 ʌi と三等韻 iɛi が海韻に含まれていると解釈することになる。このように考えを進めると、「葭：昌紿」は寄韻とは言え、何故平声のようにより音価が近い筈の四等齊韻上声薺 ɛi 韻ではなく、一等海韻に収めたのかについて説明が必要となろう[10]。いずれにせよ、葭韻 iɛi を認めることにより、海韻 ʌi と廃韻 iʌi との間で推定音価に再調整が迫られる。相配する平声、去声に関しても同様。同時に泰韻と咍/灰韻の主母音の推定にも影響が及ぶ可能性がある。

董同龢 1954 の推定音価では葭韻（、栘韻）は A -jæi, B -jăi（＝祭韻）（合口韻類の推定音価は一律省略）。今、「葭：昌待」各字の推定音価を附すと以下のようになる：「昌 $tʃ^{h}$jɑŋ 待 dʌi」→ $tʃ^{h}$jʌi≠「葭」$tʃ^{h}$jæi 。ちなみに廃韻は jɐi、止韻は i。二等佳韻が æi、祭韻が A -jæi, B -jăi。この説に従った場合でも海韻一韻中に主母音の異なる一等韻 -ʌi と三等韻 A -jæi(,B -jăi)が同居することに変わりは無い。一韻中に一等と三等の韻類を包含する東一等 uŋ/uk：三等 juŋ/juk、歌一等 ɑ：三等 jɑ の場合とは状況が異なる。寄韻とは言え、やはり董同龢説でも一等海韻：三等葭韻の主母音の不一致は残されたままで、これについての何らかの説明が必要と思われる。

この二つの反切（1,2,3.と 4,5,6.）で示される小韻はいずれも代表字だけから成り、他に同音字はない。1.(=2, 3.) は韻末に位置するとは言い難いが、韻末に近い位置にはある。そして韻末にあるいずれも一字のみの増加小韻 4.「佁：夷在」、5.「疙：如亥」、6.「胰：與改」と上字声母と下字韻母の共起制約に違反するという点で性質を同じくしている。それ故、原本『切韻』の段階から存在すると推定されるものの、増加小韻であるかの如き様相を呈している。以下、先ずは増加小韻の 4, 5, 6. を先に取り上げて検討を加え、然る後に 1.(=2, 3.) を論ずることにする。

4, 5, 6. のうち前二者は原本『玉篇』と反切が一致しており、原本『玉篇』から字面を変えることなく取り込んだと見られる。『切韻』増補作業における『玉篇』の利用については古屋昭弘

8 李榮（1952：26）“反切上字三甲等(カールグレンの α 韻に同じ――太田)，下字一等，被切字三甲”。但し修訂版（1956：80,101）では“三甲(等)”から重紐韻を独立させて寅類とし、残りを丑類と呼ぶように改めた。つまり丑類は本稿で言う C 類（の一部）に相当。なおこれに含まれない純三等韻は子類としている。

9 平山久雄（1966：92）では「栘：成兮」を「（祭 開平）」として挙げており、栘韻の存在は認めている。

10 平声の場合は齊韻 ɛi：栘韻 A:iɛi、B: ɪɛi。「栘 ʑiɛi：成 ʑiɛŋ 西 sɛi」は上字が介音をも担うと解釈できる。

（1979, 1983, 1984）に詳しい。『玉篇』においては匣母と云母の未分化が知られている。そして中古音に即して表現すれば、云母字が洪音帰字の反切上字として用いられることがあるが、時に以母の混用もまた見られる。云母と以母の混用は主に重紐 A 合口帰字の反切に集中するが、洪音字においても 4.「佁」以外に以下のような例が見られる。

藟：餘戞　　語以 + 黠見開　　（《廣韻》黠韻 胡八(開口)）
莖：餘耕　　語以 + 耕見　　（《廣韻》耕韻 戶耕(開口)）

恐らく『玉篇』に反映する非規範音層の音韻体系にあっては匣母、云母、以母が ɦ ~ ɦj のような変異状況にあった。後の声調変化では上声において匣母が全濁として陽調に属することになるのに対し、後二者は次濁として、陰調に属するというふうに振舞を異にするが、『玉篇』においては現代呉方言同様、この三母は一律濁＞陽の範疇に属していたのだろう。

原本『玉篇』第 81.肉部は失われ、確認できないが、6.「腴」もまた『玉篇』由来だろう。

腴　：羊改切。肥也。又音與。　　宋本《玉篇》上 73b5
腴　：羊汝(>改)切。肥也。又音與。　　元本《玉篇》125/11

如上の例を見ると、宋本『玉篇』及び元本『玉篇』とは反切が一致していないことが分かるが、下字が「改」、上字が以母字という点は共通する。6. の反切用字が原本『玉篇』由来ならば、宋本『玉篇』が上字を「羊」に改めたことになる[11]。原本『玉篇』では「羊」は希少上字で、上田正 1986 によれば僅か 2 例しかないから、「羊」でなかった可能性は高い。これが誤切である点については以下で論ずる。

5.「疠」については幾つかの解釈が可能である。先ずは原本『玉篇』では日母字が洪音帰字の上字として現れることが間々あることを考慮すべきである。つまり「泥（娘）−日不分」に起因すると見做せる。類例には以下のようなものがある。

疒　：汝才。　　上田正（1986: 57）　cf.《廣韻》咍韻 奴來切
苶　：汝結。　　上田正（1986: 378）　cf.《廣韻》屑韻 奴結切?　薛韻 如列切?
涅　：如結。　　上田正（1986: 378）　cf.《廣韻》屑韻 奴結切
蜧　：汝尸。　　上田正（1986: 22）　cf.《廣韻》脂韻 女夷切
鑲　：女羊。　　上田正（1986: 120）　cf.《廣韻》陽韻 汝陽切
鄾　：乃章。　　上田正（1986: 120）　cf.《廣韻》陽韻 汝陽切
黽縄：女兗。　　上田正（1986: 214）　cf.《廣韻》獮韻 而兗切
嬈　：奴紹。　　上田正（1986: 218）　cf.《廣韻》小韻 而沼切
溺　：奴灼。　　上田正（1986: 389）　cf.《廣韻》藥韻 而灼切

これ以外に拗音帰字に洪音下字を用いた反切と解釈する余地もある。類例は以下の通り。

詴：如藍　　上田正（1986: 118）　cf.《廣韻》鹽韻 汝鹽切
呷：如甘　　上田正（1986: 118）　cf.《廣韻》鹽韻 汝鹽切

11 この推測に合致する例に以下のものがある：鸜：庾恭→羊恭、歟：與於→羊於、糯：愈朱→羊朱、懩：瑜季→羊季、鎰：餘質→羊質季、懌：餘石→羊石。原本『玉篇』の上字がいずれも 6. 同様、遇摂字である点も注目すべきである。但し別に以下の一例もある。瘍：以赤→羊赤。

蚺：如酣　　上田正（1986: 118）　cf.《廣韻》鹽韻 汝鹽切
鼸：人三　　上田正（1986: 118）　cf.《廣韻》鹽韻 汝鹽切
餂：仁三　　上田正（1986: 118）　cf.《廣韻》鹽韻 汝鹽切

ここでは日母上字の反切のみを挙げたが、『玉篇』には「囂：許高」、「朁：於桑」等のように他の声母の例もある（「帰字三等：上字三等＋下字一等」の例は以下で論ずる）。また四等帰字の場合は三－四等韻の合流も考えられる。以下は『玉篇』における三－四等韻合流と思しき例の一端。上掲「泥（娘）−日不分」例中の「苶：汝結」も「《廣韻》薛韻 如列切」としてここに挙げるべきかも知れない。

髯：如兼。　　上田正（1986: 158）　cf.《廣韻》鹽韻 汝鹽切。“兼”，添韻

例：良計	祭來	←陽來 + 霽見	cf.《廣韻》祭韻力制	
瞟：千世	霽精	←先清 + 祭章	cf.《廣韻》霽韻七計	
歲：思惠	祭合心	←之心 + 霽合匣	cf.《廣韻》祭韻相鋭	
揙：甫賢	仙幫 A	←麋非 + 先匣開	cf.《廣韻》仙韻卑連	
泉：似蠲	仙從合	←止邪 + 先見合	cf.《廣韻》仙韻疾緣	又從−邪不分
虹：丑經	清徹	←有徹 + 青見	cf.《廣韻》清韻丑貞	

恐らく如上の要因が複数重なり合って如上の例外反切が成立したのだろう。「泥（娘）−日不分」については前節 **1.2.「鬱：人分」**で紹介した呂忱の特徴と軌を一にしており、六朝期の反切の遺風を伝えるものではないか。4.「佁」は止韻以母「以：羊己」小韻所属字にもなっている。もし『玉篇』由来の「夷*jiei 在*dzʌi」[12]が上字が拗介音をも担う反切であったならば、中古音の枠組みでは止韻の「羊*jiɑŋ 己*kiʌi<*kiʌɯ」と本来は等価にして字面の異なる反切とも考え得る。されば、5.「疠」も止韻日母「耳：而止」小韻に収めるべきかもしれない。さもなくば「泥（娘）−日不分」と見做して、海韻「乃：奴亥」小韻に収めるべきものだろう。

つまり 1.(2, 3.)以外は『玉篇』反切を字面を改めずに取り込んだ結果、中古音系において例外的な地位を占めることになり、額面通り解釈すると中古音としては実在しない字音を生み出すことになってしまうということである。

上掲1.小韻（=2, 3.）もまた増加小韻の様相を呈してはいるが、上田氏の推定によれば原本『切韻』の段階から存在する。

以下に挙げる「茞」の『経典釈文』引用例には『字林』という書名は現れないが、やはり早期反切との関連が窺われる。併せて『山海経・郭璞注』に見える音注その他も挙げておく。

1.茞：本又作“芷”，昌改反。韋昭《漢書注》云，香草也。昌以反。又《說文》云，……齊人謂之茞，昌在反。　《禮記二》187/15b/4
2.茞：昌改、昌敗二反。《本草》云，“白芷”。一名白茞。《爾雅下》425/4b/11

3.茞：香草，蘭之類，音昌代反。《山海經・北山經 郭璞注》13b7
4.茞：昌改。《文選集注》63/7a15 狩野充德（2000） 資料篇 p.19
5.茞：昌改。《漢書》、《後漢書》、《史記索隱》 大島正二 1981 資料 p.27
6.芷：昌改。《史記索隱》 大島正二（1981） 資料 p.27

12 『新撰字鏡』所引玉篇反切は「幾在」。「夷」、「幾」は草体では酷似するから、「夷」が「幾」の誤りである可能性も無いではない。『集韻』海韻母「改：己亥」小韻所属字中には「佁」が見える。

7.茝：昌改。《爾雅音釋・釋草》p.170/4
8.茝：昌改。大徐本《詁林》7/265a 、十卷本《篆韻譜》5/12a1、五卷本《篆韻譜》p.184/4
9.茝：昌待。 大島正二 1981 資料 p.27 =**切三、王二**
10.茝：昌亥。《繫傳》2/5a/5
11. cf. 茝：齒改反。 《玉篇》(『篆隸万象名義』4/27a1 所引)上田正 1986, p.195
12. cf. 茝：齒改。《文選》 大島正二（1981） 資料 p.27
13. cf. 蘭茝 昌礼反。《郭注爾雅》云，“茝，香草也”。《慧琳音義》 麗 98/9a1
14. cf. **止**：渚市切。 **茝** 香草。《字林》云，蘼蕪別名。又昌待切。…… **芷** 白芷。藥名。又芷陽，縣名。 《廣韻》止韻章母
15. cf. **止**：渚市切。 **芷** 香艸。 **茝** 艸名。糜蕪也。 《集韻》止韻章母
16. cf. **齒**：醜止切。 **茝** 艸名。 《集韻》止韻昌母
17. cf. **茝**：掣睨切。香艸名，似蘭。齊謂之茝，楚謂之蘺。 《集韻》薺韻昌母
18. cf. **茝**：昌亥切。艸名。《說文》“蘥也”。 《集韻》海韻昌母

この反切は『字林』佚文でその存在を確認することはできない。用字同一の反切は確認できていないが、類似の反切は郭璞の音注に見ることができる。2 の「昌改、昌敗二反」は現存の『爾雅郭注』では存在を確認できない。『経典釈文・爾雅音義』が何に基づくか、またそれが郭璞であったとしても、後人による用字の改変はないのか、疑問は残るが、3 の例を見ると、一先ず 2 の「茝：昌改」は郭璞由来と考えてよいのではないか。

郭璞の音注には全濁上声と全濁去声の混用が散見する。

睇：悌 (被切字去聲霽韻定母，下字上聲薺韻定母) 《方言》2/no.15
袒：但 (被切字上聲旱韻定母，下字去聲翰韻定母) 《方言》4/no.28
攡：晃 (被切字去聲宕韻匣母，下字上聲蕩韻匣母) 《方言》41/no.66
胴：洞 (被切字去聲送韻定母，下字上聲董韻定母) 《方言》12/no.73

「昌代反」（「代」は咍韻去声代韻並母）に後人の書換えが無いものとすれば、「昌改反」が早い時期にこのようにも表記された。また「茝：昌待」（「待」は海韻並母）と表記されることもあったと考えられる。「代」、「待」は声調を除けば同音である。去声夬韻並母字を下字とする「昌敗反」は代ー夬相通ではなく恐らく誤切である（後述）。『広韻』「昌紿切」の下字「紿」は「待」と同音、海韻並母である。恐らく上声、去声の二音が存在したということではなかろう。

『慧琳音義』の「昌 tɕʰiɑŋ>tɕʰiɑŋʷ 礼 lɛi>liei 反」は唐代になってから、下字を改めたものであろう。中古音の枠組みで見れば、下字は四等韻であるから依然類隔切であるが、当時の音韻体系であれば、中古四等韻には既に拗介音が生じていたから、これで海韻三等相当の(tɕʰiɛi 或 tɕʰiði ?>) tɕʰiei を表わすことができたのだろう。当時にあっては一等は泰と咍/灰が合併し、咍泰開 ɑi、灰泰合 uɑi、三等韻の廃祭と四等韻の齊が合併して、iei/uei となっていたとされる。声母については章組はなお荘組と対立を保っているから、まだそり舌音化、直音化（tɕʰiɑŋ>tɕʰiɑŋʷ>tʂʰɑŋʷ）してはいなかったと考えて良い。ここで挙げた慧琳の音価も説明の便宜のために本稿筆者が平山説に勝手に手を加えたもので、十分な検証を経たものではない。

恐らくは、これもまた誤写に起因し、本来は「茝：*旨𠂤」であったと考える。「𠂤」は刻本であれ、写本であれ、左側部分が「已」か「巳」か判然としない場合が少なくない（写本だと右側の「攵」が「夂」となっている場合も）。以下、両者を「𠂤」で統一して表記する。異体字の「𢀛」についても同様。「𠂤」は『広韻』に見えないが、異体字「𢀛」が止韻「以：羊己切」小韻にある。『集韻』も同様で、「𠂤」を止韻「以：養里切」小韻に収める。そして「茝」は止

韻「止：渚市切」小韻に「芷」と共に収められる（＝『集韻』）。上掲例の 14, 15.参照。「𠂢」は反切用字として例を見ないが、以下のようにも考えられる。早期反切では使用されることもあった。しかし容易に「改」に誤認される故に反切用字としての適性に早々に疑問符が付き、後には全く使われなくなってしまった、と。ここで推測した「茝：*旨 tɕi 𠂢 jiǎɪ」は「茝：諸 tɕiə 市 ziǎɪ 切」とは用字不同にして同音の異切ということになる。ならば上掲例 6 もまた「芷：*旨𠂢」を誤ったものだろう。2.「昌敗反」もまた「*旨𠂢反」の誤りと見做せる。つまり 2.は由来を同じくする用字の異なる二つの誤切の併記である。興味深いことに、「8.茝：昌改」は二種の『篆韻譜』いずれにおいても 14.海部に収められるが、反切用字は「昌𠂢」に作る。上掲『経典釈文』「2.茝：昌改、昌敗二反」に見える「改」も宋本では「𠂢」に作る。『篆隷万象名義』に見える「11. cf. 茝：齒改反」の「改」も厳密には「𠂢」である。また写真で確認できるところでは、見母小韻代表字「改」を切三は「巳攴」（厳密には「己」若しくは「已」に「攴」）、王一は「𠂢」に作る。切三にはまた「亥：胡巳攴」（厳密には「已」に「攴」）、「欬：於巳攴」（厳密には「己」に「攴」）のような反切下字の用例もある。『篆隷万象名義』も切三とほぼ同じ字体で「巳攴：公亥」（厳密には「已」若しくは「巳」に「攴」）を挙げる（5/63a6）[13]。但し同書では反切下字としては「巳攴」の用例は無く、「改」に混じり、「𠂢」が現れるのみである。これ以外の文献における「𠂢」の使用例としては『玄応音義』に「毎，《字林》莫𠂢反」(巻 6 金蔵 p.907 下；天平写本 8b7)、『慧琳音義』に「胲：𠂢亥」(14/28a1)がある。これらの例の中には日本人書写のものもあるが、この字体を論じるに当たっては同列に並べて論じて構わないだろう。このような字体の使用状況は如上の推論に一層の信憑性を賦与する。

郭璞の「昌代反」にしても「茝：*旨𠂢」を「茝：昌改」に誤まったものを「昌待」に改め、更に全濁上と全濁去の合流を背景に全濁上の下字「待」を同音となった全濁去の「代」に改めたと解することができ、六朝期に誤切が既に定着していたと想定することになる。但しこれは誤切の始まりが「昌改」であることを前提とした議論である。精緻な反切が何時頃誕生したかという問題にも関わるので、更なる検討が必要であるが、他の解釈が思いつかない。先ずはこの推測に基づいて論を進めたい。これもまた誤切であるにせよ、既に六朝期には「茝：昌改」という音は行われていたのであろう。ではこの反切は当時どのように捉えられていたか。

帰字と下字の等位が一致しない反切は中古音以前には存在していた。先に該当例を一部紹介したが、唐代初期のものを含めた早期反切では稀にこのような反切が見られる。

重音直工　　《文選音》（功臣、三國、東方、典引四見）　周祖謨（1939: 123）
　“重”，通合三平鍾澄；“工”， 通合一平東見
炎音矣三　　《文選音》（見典引。《廣韻》于廉切）　　周祖謨 1939 p.123
　“炎”，咸開三平鹽云；“三”， 咸開一平談心

以下は原本『玉篇』に見える、既に挙げた日母上字以外の例の一部。上田正 1986 に拠る。

楢：昌老	小昌	←陽昌 + 皓來	上田正（1986: 221）	cf.《廣韻》小韻 尺沼
將：即郎	藥精開	←職精 + 唐來開	上田正（1986: 126）	cf.《廣韻》陽韻 即良
約：於託	藥影開	←魚影 + 鐸透開	上田正（1986: 118）	cf.《廣韻》藥韻 於略
醃：於甘	鹽日	←魚影 + 談見	上田正（1986: 118）	cf.《廣韻》鹽韻 央炎

『経典釈文』にも以下のような例が見られる。最初の「朽」以外は上下字の結合状況だけを見

13 逆に「巳攴：余中(〉止)反」の方が左部分を「己」とし、「改」の異体字のようになっている(5/65b3)。宋本『玉篇』は正しく「𠂢(：余止切)」に作る(中 65b10)。

れば音和切だが、帰字と下字は等位が一致しない。

杙 ：餘則 職羊 ←魚羊 + 德精 《周禮》115/16b/5
（餘式反。劉～。）
杙 ：羊北 職羊 ←陽羊 + 德幫 《毛詩上》54/4b/2
（本亦作弋。羊職反。郭《爾雅》云，……）

咮：都豆反 帰字三等－下字一等 （《廣韻》陟救切）
（本亦作噣。郭(璞)張救反，何～。 《毛詩上》56/7b4）
（陟救反。徐(邈)又～。 《毛詩中》72/4b4）
cf. 竹又反。徐(邈)下(>丁)遘反。 《左傳三》257/21b9
廡：莫杜反 帰字三等－下字一等 （《廣韻》文甫切）
“杜”，宋本等作“柱”。黃焯 1980, p.39 訂作“柱”。今從通志堂本，不改。
（無甫反。徐(邈)～。 《尚書下》46/3b7）
蔟：子侯反 帰字三等－下字一等 （《廣韻》側鳩切(莊母) “子”，精母）
（側留反。劉(昌宗)～。《周禮下》127/4b2）
蔟：作侯反 帰字三等－下字一等 （《廣韻》側鳩切(莊母) “子”，精母）
（側留反。劉(昌宗)～。《儀禮》157/30b10）
驟：在遘反 帰字三等－下字一等 （《廣韻》鋤祐切(崇母) “在”，從母）
（愁又反。徐(邈)～。《左傳四》265/9b1）
（士救反。又～。《莊子上》364/9b7）
驟：才(>在?)遘反 帰字三等－下字一等 （《廣韻》鋤祐切(崇母) “才”，從母）
（在(>仕)救反。劉(昌宗)～。《周禮下》126/2b11）
騜：于亡反 帰字一等－下字三等 （《廣韻》胡光切(匣母) “于”，云母）
（音皇。《字林》～。《爾雅下》437/27b8）

切韻系韻書の中にさえも以下のような例が見られる。恐らく六朝反切由来であろう。

恭 kɪoŋ 平 ： 駒 kʏuŏ 平 冬 toŋ 平 (ʏ=ɪ+u)（冬韻所属。王二、王三、P2014-1、P2015-1、P3798 ）
cf. 恭 kɪoŋ 平 ： 九 kɪǎu 上 容 jɪoŋ 平 （《廣韻》鍾韻）

つまり『切韻』以前にあっては、帰字と下字の等位が異なる、両者の所属する韻が異なる反切も許容されたということである。『広韻』においては反切用字の改訂が施されてこのような反切は見られないが、『切韻』の分韻が確立する以前の早期反切では違和感が少なかったのであろう。中古音の枠組みで言えば、同一摂内の一等–三等間（洪細の差異）の通用である。これ以外の等位不同反切については韻の合併で解釈できるものもあるので例として挙げない。如上の例は江東音を反映するとされる文献のものばかりであり、これが方音の反映なのか、江東地域の学統の反映なのか、検討が必要であるが、ここではこれ以上論じない。

説明が前後するが、ここで先に取り上げた『広韻』4. 「佁：夷在」、6.「腲：與改」についても補足しておきたい。共に以母小韻で、『広韻』にしか現れない増加小韻であった。

4. cf. **佁**：癡也。夷在切。一。 増加小韻 =《玉篇》上田正（1986 196）
以：羊已切。 **佁** 癡也。《說文》讀若騃。又夷在切。 止韻以母
（切三、王一、王二、王三、TIVK75-1 都作羊止反）

6. cf. 腆：肥也。與改切。二。 腀。上同。增加小韵　4.と同音
cf. 腆　：羊改切。肥也。又音與。　　宋本《玉篇》上 73b5
cf. 腆　：羊汝(>改)切。肥也。又音與。　　元本《玉篇》125/11
cf. 腆　：演女切。肥也。　　《集韻》語韻以母 332/6/7
cf. 腆腀：倚亥切。肥也。 或作腀。　　《集韻》海韻影母 350/9/1

先ずは後者から。先の推測の上に論を進める。もし原本『玉篇』の「*腆：與改切」もまた何らかの引用経典に附されたものに由来するなら、原典が既に「改」に誤っていたのか、はたまた『玉篇』がこれを取り込むに当たり誤ったのか、二様の可能性があるが、「腆(腀)」に関しては佚文の存在も知られておらず、確かめようがない。4.と 6.が共に『玉篇』からの引用であるならば、何故一つの小韻に纏めなかったのかとの疑問が生じるが、字書である『玉篇』には同音にして用字不同の異切が複数存在する。『広韻』はそれを別音と見做して処理したということであろう。「腆」はその声符から見て止韻所属と見做し難い。恐らく「腆」はそもそも「與」と同音であった。『広韻』語韻以母「與：余呂」小韻には見えないが、上掲例に見る如く、宋本『玉篇』、元本『玉篇』に「又音與」とあり、『集韻』語韻以母「與：演女切」小韻中にも現れる。元、反切下字が「呂」だったものを「㠯」（「以」の古文）に誤ったことが発端だろう。既に指摘したように『広韻』止韻「以：羊己」小韻には異体字「㪅」が収められている。つまり誤写により反切下字が「呂」>「㠯」となった後に同音の「㪅(㪅)」に改められ（その理由は不詳）、更なる誤写で「改」となった。「腀」は文献では止韻音の存在を確認できないが、そもそも「腀：羊㪅」で、「腆」の反切下字が「㪅」となった段階で「腆」と同音と見做されるようになった。他に「异」と「㝵（「與」の古字)」が字体の類似から混同若しくは通用され、「腀」が「腆」と表記されるようにもなったという可能性も無いではない。但し「月」と「㝵」の組み合わさった実例は見ない。甚だ危うい推論ではあるが、当座の解釈として合わせ提示しておく。4. 「佁：夷在」にしても止韻に又音があることは注目に値する。これについても穿った見方をするなら、止韻音が本来で、反切下字「㪅」を「改」と誤り、それを更に「在」に改めることで海韻小韻となったと考えられないではない。牽強付会の誹りを免れないところであるが、「㪅」が反切下字として存在したと想定することで、様々な点が説明可能となることは否定できまい。

『広韻』及びその他の切韻系韻書では齊韻上声薺韻に例外反切は存在しない。董同龢–龍宇純説に立てば、上声茝韻に関しては四等薺韻ではなく、一等海韻に寄韻させたということになる。

齊韻去声霽韻には一見、祭韻に帰属させるべきものが誤って紛れ込んだかのような以下の増加小韻がある。王二、『広韻』のみに見られる。これについても言及しておこう。

篴：丑戾　王二、廣韻
---
1. **攄**：丑居切。　**筡**　竹篾名也。　《廣韻》魚韻徹母
2. **徒**：同都切。　**筡**　《爾雅》曰：“簢筡中，言中空竹類”。　《廣韻》模韻定母
3. 筡：郭(璞)音徒、又音攄。施(乾)音儲。　《經典釋文・爾雅》427/8a9
4. 筡：恥於　《博雅音》丁鋒 1995/2682
5. **筡**篴：丑戾　《集韻》薺韻徹母
6. **書**：商居切。　**筡**　筡，竹笢也。　《集韻》魚韻書母
7. **攄捈**：抽居切。　**筡**　艸名。《爾雅》“簢筡中，言中空竹類也”。　《集韻》魚韻書母
8. **除**：陳如切。　**筡**　艸名。簢筡中。　《集韻》魚韻書母
9. **徒**：同都切。　**筡**篴　《說文》“折竹笢也”。或作篴。　《集韻》模韻定母
10. 筡：音徐。　《方言・郭璞注》13/no.17

「篧」は「笨」の異体字である（5, 9.参照）。「笨」には魚韻徹母（1.丑居切、3.又音攩、4.恥於、7. 抽居切）、模韻定母（2. 同都切、3.音徒、9. 同都切）、魚韻澄母（1.音儲、8. 陳如切）、魚韻書母（6. 商居切）などの音が見られる。王二、の「篧：丑戾」は5.の『集韻』の記載と一致するが、恐らく共に魚韻徹母の「丑居」を誤ったもので、『広韻』に即して言えば、1.魚韻徹母「丑居切」小韻の「**笨**」の直後に「上同」との注釈を施して、増加字として付け加えるべきものであった。なお10.「笨：音徐」は「笨：音涂」（＝3.「音徒」、9.「同都切」）の誤りか、さもなくば徹母の上字が脱落した魚韻反切を直音注と誤認したもので、邪母音を認める必要は無い。

上田正 1976 が原本『切韻』反切と推定する「茝：昌待」及び上掲例中の「昌紿」、「昌改」、「昌亥」は誤切でないならば、上掲の帰字−下字等位不等反切と同様の性格を持つものと見做さねばならない。しかし東韻、戈韻などは一韻中に一等韻と三等韻が含まれるが、主母音は同じと推定されている。同一摂内の一等−三等間（洪細の差異）の通用を利用した反切も拗介音の有無のみならず、主母音の一致が前提となると思われる。そうでなければ上字が介音をも担う反切にはならない。海韻三等を祭韻上声と考えるなら、帰字と下字の主母音が一致しないから、「茝：昌紿(/待/殆)」を上掲例同様に上字が介音をも担う反切と見做すことには無理が生じる。適字が無いので止む無く一等字を用いたという説明を以てしても、何故、平声の場合のように「茝」をより音価の近い四等薺韻に寄韻させなかったのかという疑問は解消されない。

3. 結語

「茝」の現代音は「芷」同様、zhǐ であるべきで、chǎi は誤切に基づき、昌母 (tɕʰ>)tʂʰ と海韻 (ʌi>)ɑi を強引に結合させて生み出された字音である。中古音にあっても存在しない筈のものだが、かなり古くから行われていたようである。『切韻』に収録されたことで、規範音としてのお墨付きを得て、存在が強固なものになったのだろう。本来が架空の字音であったにせよ、これを中古音に認めると言うことになれば、該当小韻が僅か一つしかない三等韻 iʌi を認めねばならない。

誤切によって生まれた架空の字音と断じたものを除けば平声咍韻に三等字は存在しない。栘韻も認めるには及ばない。去声についても代韻、霽韻のいずれにも三等韻は存在しない。ならば代韻三等は既に祭韻として独立していると考えて良いものか、そして董同龢−龍宇純説のように海韻三等を祭韻に相配する上声（茝韻）と考えて良いものか、という疑問に回答する必要が生じる。誤切が独り歩きして、実在するようになった場合に、これを体系内に組み込んで解釈しようとすると新たなる課題に直面する。誤伝によって生じた例外反切を実在するものとして音韻体系を考察することは、外来語によって生まれた新たな音韻を認めて改めて音韻体系を構築し直すことに似る。しかし上古―上中古の音韻との対応関係を追求する上ではこのような誤切は極力排除すべきである。断じて誤切に対応する上古音を再構するようなことをしてはならない。その立場に立てば栘韻も茝韻も認めるべきではない。

原本『切韻』では拯韻のように「拯」一字のみにも拘わらず、「無反語。蒸之上聲」という例外的な音注を附してまでしてわざわざ一韻を立てているケースがある。一方、これとは対照的に腫韻中に冬韻上声小韻は存在しないが、現存する切韻系韻書では冬韻上声の韻目を立てずに、腫韻中に該当字を寄韻させている。但しこれらの小韻は原本『切韻』には存在していなかった。原本『切韻』には全体を見渡しても、「茝」以外に寄韻と見做せそうなものは無い。原本『切韻』において本来あるべき韻目が欠落する不備があったにせよ、増補に際し新たな韻目を設けることは稀である（開合分韻を除く）。寄韻とは恐らく増補改訂を行う中で、そのような欠落した韻目に収められるべき、原本『切韻』に漏れた小韻を処理するに当たり、新たな韻目を設けることが憚られて考案された、言わば苦肉の策であろう。栘韻は一部の韻書及び韻書の韻目を用いた字書などに関する記載から、その存在を知られてはいるが、所属小韻についての具体的情報は無く、

韻目からその一端が推測されるに止まる。増補改訂で生まれた新たな韻目を極力取り込む姿勢を見せている、切韻系韻書集大成の『広韻』にこの栘韻が見えないことは、編纂に当り参照した切韻系韻書テキストに無かったからと考えられる。更にその理由を詮索するならば、殆どの改訂版テキストが編纂時に目睹できなかったほどの増補改訂最晩期の試みだったからか、さもなくば、奇異に思われ、大方の賛同、採用するところとならなかったかのどちらかであろう。「莒：昌待」が祭韻上声として一韻を成すような存在であるならば、たとえこの小韻以外に該当するものが無くても、原本『切韻』において拯韻と同じように、「無反語。祭之上聲」のような音注を以て一韻とされ、海韻に収められることは無かったに違いない。

テキスト（参考文献リストに挙げているものもある。順不同）

《山海經》　郭璞注，日本國立公文書館デジタルアーカイブ　槐蔭草堂清刊本(309-0086)
《爾雅校箋》　周祖謨撰，江蘇教育出版社，共 367 頁。內有《爾雅音釋》
《方言》　揚雄，周祖謨校 吳曉鈴編 1956《方言校箋及通檢查》，科學出版社，95+1 地圖 +60+249 頁(原巴黎大學北京漢學研究所通檢叢刊之十四，1951)
《釋名》　劉熙，任繼昉纂，齊魯書社，2006，四部叢刊影印江南圖書館藏明嘉靖翻宋本為底本，共 649 頁
《經典釋文》　鄧仕樑 黃坤堯《新校索引 經典釋文》，學海出版社，(上)共 439 頁;(下)索引 共 589 頁
《玄應音義》　東國大學校 1976《高麗大藏經》第 32 冊(1-340 頁)
《慧琳音義》　東國大學校 1976《高麗大藏經》第 42(共 1071 頁)、43 冊(共 1007 頁)
《廣韻》　張士俊重刊澤存堂本，1967，臺灣藝文印書館影印 (原周祖謨 1951《廣韻校本》，商務印書館，線裝 5 冊，1951)
《集韻》　丁度等，上海圖書館藏述古堂影宋抄本。上海古籍出版社，1985，846+索引 605 頁
宋本《玉篇》　張士俊澤存堂本《大廣益會玉篇》，中華書局影印，1987，138+索引 104 頁
元本《玉篇》　臺灣洪浩培影印元刻本(=四部叢刊所收涵芬樓影印本)，新興書局，1968，洋裝 共 416 頁
《說文解字繫傳》　徐鍇，祁嵩藻刻本影印本，中華書局，372 頁
《說文解字》　許慎，徐鉉校（《說文解字詁林》，丁福保撰，醫學書局，1932; 國民出版社再印，1960，正編共 65 冊 7023 頁 所收）
五卷本《說文篆韻譜》　徐鉉，天理圖書館藏元刻本，八木書店，1981，1-382 頁
十卷本《說文篆韻譜》　徐鉉，馮桂芬縮摹刊，1864
《古文四聲韻》　夏竦，北京圖書館宋刻配抄本，《汗簡・古文四聲韻》，中華書局，1983，94 頁
《十韻彙編》　劉復等， 線裝 4 冊，國立北京大學出版組，1936；臺灣 學生書局，洋裝一冊，1963.10 影印一版
『悉曇藏』　安然，大正新脩大藏經第 84 卷 pp.365-462 所収，同刊行會，1931.12,

この他、古写本、刻本に見える字体に関しては以下の文献を利用した。

《中華大藏經》56 所收金藏《玄應音義》，中華書局，1993，存卷 1-7，9-10，13-14(813-935，949-988，1003-1039 頁)
宋本《經典釋文》, 陸德明，上海古籍出版社，1980，線裝 7 冊
『玄応一切経音義』，山田孝雄編，西東書房，1932，線装 7 冊
『篆隷万象名義』，空海，高山寺古辭書資料第一（高山寺資料叢書第六冊），高山寺典籍文書綜合調査團，東京大学出版會，1977，700p.

参考文献（著者名アイウエオ順）

日本語

上田正 1976『切韻諸本反切総覧』，均社，222p.

上田正 1986『玉篇反切総覧』，自家版，563p.

大島正二 1981『唐代字音の研究』，汲古書院，364+資料 759p.；索引 758p.

太田斎 2013『韻書と等韻図 1』（神戸市外国語大学　研究叢書 第 52 冊），神戸市外国語大学外国学研究所，258p.

狩野充徳 2000『文選音決の研究』，渓水社，277+341+119p.

平山久雄 1966 敦煌毛詩音残反切の研究（上），『北海道大学文学部紀要』XIV-3，pp.1-243

平山久雄 2006 上古漢語の音素体系，『開篇』25，pp.1-23

平山久雄 2022『中古音講義』，汲古書院，222p.

古屋昭弘 1979 王仁昫切韻に見える原本系玉篇の反切—又音反切を中心に—，『中國文學研究』，pp.128-140

古屋昭弘 1983『王仁昫』新加部分に見える引用書名等について，『中國文學研究』9，pp.150-161

古屋昭弘 1984 王仁昫切韻と顧野王玉篇，『東洋學報』65-3/4，pp.1-35

森博達 1982 武玄之『韻詮』の岑韻について，同志社大学『外国文学研究』第 33・34 合併号，pp.81-90

中国語（著者名拼音順）

丁鋒 1995《〈博雅音〉音系研究》，北京大學出版社，共 194 頁

董同龢 1954;1955《中國語音史》，中華文化出版事業委員會 190+勘誤表 4 頁，共 318 頁

簡啟賢 2003《〈字林〉音注研究》，巴蜀書社，共 374 頁

李榮 1952《切韻音系》（語言學專刊 第四種），中國科學院，共 182 頁；科學出版社，1956，共 182 頁

劉復等 1936《十韻彙編》，國立北京大學出版組，線裝 4 冊；臺灣影印洋裝本，學生書局，1963，共 494 頁

龍宇純 1960《韻鏡校注》，藝文印書館，共 318 頁

龍宇純 1968《唐寫全本王仁昫刊謬補缺切韻校箋》，香港中文大學，共 725 頁+附錄

余明象 1980《廣韻》札記一則，《中國語文》第 5 期，347 頁

周祖謨 1939〈論文選音殘卷之作者及其方音〉，《輔仁學誌》8-1，113-125 頁

周祖謨 1983 《唐五代韻書集存》上下，中華書局，1-625; 626-1022 頁+附表 23 頁